

主の降誕

2011.12.24

ルカ 2・1-14

今晚私たちは大変な寒さの中、クリスマスのミサのためにここに集って来ました。けれども、このクリスマスのミサのために私たちが身を晒した寒さが、今年のクリスマスを一層引き立てているようにも思えます。何故かと言うと、私たちが身をもって感じるこの寒さが、私たちよりもはるかに過酷な状況の中でクリスマスを迎えた人々への、私たちの思いを募らせるようにも思えるからです。

いつの間にか、私たちの心の中に定着しているかもしれないクリスマスの暖かなムードは、私たちが外の世界を忘れて、自分たちだけでその中にヌクヌクとしているとするなら、クリスマスによって神が私たちに伝えようとしたことを台なしにしてしまうかもしれません。クリスマスはその初めから、この世界の最も過酷な状況の中で、その光を輝かせ続けてきたのです。身を寄せる宿もなく、寒空のもと、やむなくベツレヘムの馬屋に人の世の生を受けた神のいのちが、クリスマスの私たちへのメッセージの中心です。それぞれの時代の過酷な状況の中に生きた人々の心を、クリスマスはこの中心に向かって、すなわち、稜桶に眠る乳飲み子の姿において示された神のいのちへと招き続けて来たのです。クリスマスはその初めから、この世界の現実の歴史を生きる人々とともにあったのです。そのようにして、私たちが生きるこの現実の世界に、神のいのちが私たちとともに息づいていることを示し続けて来たのです。

最初のクリスマスがそうであったように、今も、ベツレヘムの馬屋に生まれ出た嬰兒が指し示す、この私たちの現実の中に息づいている神のいのちの神秘は、この世界に生きる多くの人々には知られないままです。何故なら、この世界の現実の中に生きる私たちは、その圧倒的な力の前に人間としての自分を見失ってしまっているか、その現実からの出口を求めて、そのことだけに狂奔しているからです。しかし、今晚ここに集った私たちは、そのような現実を生きる今の私たちの中に、あの最初のクリスマス以来、神のいのちが息づき続けていることに、あらためて心の目を向けるように招かれて、ここに集っているのです。

3月11日のあの大地震と巨大津波が全てを破壊し尽くした瓦礫の中に、それに追い討ちをかけた春の寒さの中で、水仙がつぼみを点けて花を咲かせたというニュースは、まだ私たちの記憶から失われてはいないはずですが、あの時、あの瓦礫の中で、自分の目でそれを見た人々が心のうちを感じたであろうことは、

私たちが安易にそれに共感することを許さない、壮絶な神のいのちの現出、いのちそのものの現われへの感動であったに違いありません。そこにいのちの息吹などありえないと思われた、あの瓦礫の中で咲出した水仙の花は、この世界の現実の彼方からもたらされたいのちの神秘を私たちにも垣間見せてくれたのです。被災直後のあの混乱の中で、この世に生を受けて生まれ出た新生児たちのその後のニュースを私たちは知りません。しかし、あの混乱を極めた避難所の暮らしの中にも、確実に新たないのちの誕生をあったのです。そしてそれを誰も阻止することは出来なかったのです。阻止しようとは思わなかったのです。いのちとは、そのようなものです。私たちが生きる現実の前に、それはいかにはかないものであろうとも、その現実を越えて、いのちは確実に新たな誕生を迎えるのです。

クリスマスは、この私たちの現実の世界の歴史の中に、神のいのちが生まれ出たことを祝う祭りです。このクリスマスそれを伝えて来たキリスト教の信仰の立場に立って祝う私たちは、この世界の現実を生きる自分たちの中に流れる人間としてのいのちが、クリスマスにおいて示された神のいのちに結ばれていることを意識しなければなりません。クリスマスの夜、ベツレヘムの馬屋に生まれ出た神のいのちは、私たちが生きる現実の世界のいのちと同じいのちを共有することによって、そのいのちがどこから来たものであるかを私たちに示そうとしているのです。このクリスマスの神秘を信仰をもって受け止めることが出来る時、私たちは、自分たちが生きるいのちが、あのクリスマスの嬰兒が示しているように、神から来たものであることを受け入れることが出来るのです。そしてこれこそが、2011年のこの現実の中で迎えたクリスマスが私たちにもたらす、最も貴重な恵みのメッセージ・福音であるのです。

2011年のこの現実の中で、私たちはクリスマスを祝うことにひけ目を感じることはないのです。2011年の私たちが生きた現実が心ある人々に気付かせたことと同じことを、クリスマスはその初めから、私たちの現実の世界の歴史の中で示し続けてきたのです。クリスマスは、私たちが現実を生きることにのみこだわって、隅に追いやってしまってきた、そしてその結果、いつの間にか忘れてしまっていた、私たち一人ひとりが生きるいのちの尊さを私たちに思い起こさせるためにあるのです。私たち一人ひとりが生きるいのちは、この現実の世界の中では、はかないのです。それゆえに、涙がこぼれるほどに、抱きしめなくなるほどに、いとおいしいのです。他の誰にとってよりも、私たち全ての者のいのちの源である神にとってそうなのです。私たちのうちに流れるいのちのいとおいさを抱きしめるために、神はあのクリスマスの夜、ベツレヘムの馬屋に人となって、私たちが生きる現実の世界に来てくださったのです。神はそのよ

うにして、放っては置けない私たちに対して絆を結んでくださったのです。

2011年の現実を生きた私たちは、「いのちの絆」というキャッチフレーズに心を向けて来ました。けれども、その2011年が過ぎ去ろうとしている今、私たちは、私たちの心を惹いたこのキャッチフレーズが、私たちの心から遠ざかってゆくことを恐れなければなりません。この現実の世界を生きる私たちは、常に新しいキャッチフレーズを必要としているからです。そのようにして、私たちの心のうちに常に思い巡らし続けなければならない、これほどの人々の犠牲の上に私たちが得たはずの貴重な経験をも、忘却というお蔵の内にしまいこんでしまうことを警戒しなければならないのです。

そのためにこそ、私たちはこの2011年の年の暮れにあたってクリスマスのミサをささげているのです。クリスマスこそが、私たちにとって、神がその身をもって示してくださった「いのちの絆」の原点だからです。神は、私たちの現実の世界に、「いのちの絆」のかけがえのなさを回復し、それを決定的に示すために、人となってベツレヘムの馬屋のお生まれになったのです。そのお方をかたどる幼子イエスのご像が安置された祭壇の前に頭を垂れて、私たちの心に去来する全ての想いが私たちの祈りとなるよう願いを込めて、このクリスマスのミサをとともにおささげしたいと思います。

カトリック高円寺教会
主任司祭 吉池好高